朝日選書 51

日本文学散歩

ドナルド・キーン

篠田一士訳

ドナルド・キーン著　篠田一士訳

日本文学散歩

朝日選書　51

ドナルド・キーン (Donald Keene)
1922年ニューヨーク生まれ。コロンビア大学仏文科卒。在学中から日本語を学び，戦後ケンブリッジ大学，京都大学などで日本文学を研究。日本文学を多数海外に紹介，1962年に菊池寛賞，1983年に山片蟠桃賞，国際交流基金賞受賞。現在コロンビア大学教授，朝日新聞社客員編集委員。著書『日本文学史・中世篇』『日本文学史・近代現代篇』『日本文学散歩』『日本人の質問』など。『百代の過客』で読売文学賞，日本文学大賞を受賞。『人間失格』など英訳も多数。
篠田一士（しのだ・はじめ）
1927年岐阜県生まれ。東京大学文学部卒。東京都立大学教授。
『日本の近代小説』（集英社）
『作品について』（筑摩書房）
『グルメのための文藝読本』（朝日新聞社）
ほか多数。

日本文学散歩　　朝日選書 51

1975年12月10日　第1刷発行
1989年1月20日　第2刷発行
定価880円

著　者　ドナルド・キーン
訳　者　篠田一士
発行者　八尋舜右
印刷・製本　共同印刷
発行所　朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2 電話03(545)0131(代表)
編集・図書編集室　販売・出版販売部　振替・東京 0-1730

©D. Keene, H. Shinoda 1975　Printed in Japan　装幀・多田進

ISBN 4-02-259151-X

ドナルド・キーン 著
篠田一士 訳

日本文学散歩

朝日選書 51

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

日本文学散歩

目次

まえがき　七
室町編
一休　一六
宗長　二七
世阿彌　三六
正徹　四五
戦国編
里村紹巴　五六
大村由己　六五
細川幽斎　七三
木下長嘯子　八二
松永貞徳　九一

江戸編
宝井其角　一〇〇
紀海音　一一
菅茶山　一一三
橘曙覧　一一三
為永春水　一一四
平田篤胤　一一五
明治編
大沼枕山　一一六
仮名垣魯文　一一九
河竹黙阿彌　一一八
東海散士　一一九
樋口一葉　一一〇
正岡子規　一一七

まえがき

「日本文学散歩」が週刊朝日に初めて連載された頃、有吉佐和子さんから電話があり、「あれは散歩らしくないですよ。あんな散歩をやり続けたらきっと疲れて死んでしまうでしょう」と言われた。その後、知人や雑誌関係者が、「ああいう原稿は朝日ジャーナルに載せるべきですよ」と何回も言っていた。私は場違いの原稿を発表しているのではないかと一度ならず反省したのである。

ところが、週刊朝日の大勢の読者に、ふだん学問誌にしか登場しないさまざまの人物を紹介して行くのは、相当の楽しみであった。宗長、紹巴、大村由己等が週刊誌に載ったのは初めてではないかと思いながら悦に入っていた。無論、描く人物の選択は、読者をびっくりさせるというような単純な基準によるものではなかった。

「文学散歩」を頼んで下さった週刊朝日の編集者たちは或いはもっと気楽な、散歩しているような原稿を望んでいたのかも知れないが、私はいろいろと考えてから日本文学を創った人たちの中で、私にとってもっとも有意義な人物のことを書くことにした。「有意義」といっても、必ずしももっとも優れた作家であるとは限らない。特に、近世文学編の原稿を書いていた頃は、意識的に一流の

作家を避け、二流程度の、あまり問題にされていない人にピントを合わせた。戦国時代の文学の場合、始めから一流文学者がいないので、別に誰それを避けるというような必要はなかった。明治時代の場合は、無名の大沼枕山と極めて有名な樋口一葉という両極端を論じるようになったのは、問題点に左右されて、選択したからである。

つまり、明治元年のことを書いた文学者や明治時代における女流文学の復活を代表する文学者のことを書こうと思ったら、必然的にこの二人が選ばれたのである。

そういう特殊な条件は別として、私は大体において各時代の文学を代表できる五、六人を選び、なるべく違った分野の人物を取りあげた。室町時代の場合、漢詩人（一休）、連歌師（宗長）、劇作家（世阿弥）、歌人（正徹）を選んだが、その後の時代の場合、詩人、連歌師（または俳人）、劇作家、歌人の他に小説家を付け加え、近世文学に限り、随筆家もその仲間に入れた。

しかし、私の目的は、機械的に各ジャンルから一人の代表者を選ぶというのではなく、各時代の文学の多様性を実証することだった。

古代、平安朝、鎌倉時代の作家を書かなかったのは、同じような多様性を感じなかったからである。

一休のことから書き出した理由は、十年ほど前から彼のことに特別な親しみを感じ、彼が残した漢詩や漢文の他、画像にも大いに惹かれているためである。一休の漢詩は一流でないかも知れない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

が、彼の人間味に抵抗できなかった。最近、一休の研究が数多く出ているので、正直なところ、私の一休像に何か特徴があるかどうか、あまり自信がないが、どうしても一休を書かなければならない気がした。

一休を書けば、一休のことを崇拝した宗長を書くのは当然の順序であろう。ところが、一休と違い、宗長はあまり知られていないし、また、宗長の最も優れた連歌——例えば、有名な水無瀬三吟——にもそれほどの個性が感じられない。こういうわけで、優雅な有心の連歌にあまり触れず、土臭い、俳諧の趣味のある無心の連歌を取り上げ、次の時代の松永貞徳や宝井其角という俳人へ移行して行く伏線を張った。

戦国時代の文学は一般に無視されており、絶対的な価値から言えば、無視されてもいいだろう。が、戦国という危機の時代を生き抜くのは現代人に近い問題であると思い、二、三流の文学者のことを書くことにした。正直言って、私は紹巴という連歌師の人格にあまり感心できないのである。ただ、戦国時代の野心的な才子がどういうふうに名声を博するようになったかという過程に関心を持っていたので、紹巴のことを調べ上げた。調べているうちに、この俗物の連歌師に不思議なほど美しいものがあると発見し、ますます関心が高まって行った。

一方では、紹巴のように戦国時代の混乱をうまく利用した人がおり、また、他方では、木下長嘯子のように、修羅場に背を向け、名声を思い切り、草庵の中で気軽な生涯を送った人もいた。私

は紹巴よりも長嘯子の方が好きだし、同様の危機に面したら長嘯子が選んだ道を歩んでみたいが、果たしてそのようにできるだろうか。危機の時代が長引く場合、特別の収入のある人でなければ早晩妥協の道を歩むはずである。紹巴や大村由己のように積極的に「新秩序」を歓迎するような文学者は、後世になって疎んじられることが多いが、彼らは意識的にそのような危険を冒し、「新秩序」の権威に寵愛されたので、われわれは別に同情しなくてもよかろう。が、ことによってはわれわれも同じ道を選ぶかも知れないことを銘記すべきである。

近世文学となると、常識的な「散歩道」を歩けば、先ず、芭蕉、西鶴、近松のことを書くことになると思うが、私はこの機会に乗じて、二番手に位置づけられる其角や海音を取り上げた。其角の場合、師匠と弟子との関係を論じ、海音の場合、ライバルの近松との関係を問題にした。

芭蕉に対する其角の愛着と抵抗は割合に分かりやすいが、海音についての文献は実に乏しいので、近松に対する態度の手掛かりがなかなか見当たらない。しかし、二人とも大先輩を意識しながら自分たちの作品を書いていたことは間違いなかろう。

西鶴の場合、彼の文学の模倣者よりも、浮世草子と近代文学との間の橋渡しであった為永春水について書いた。幕末も一種の危機であったが、春水の小説を読んでも危機意識は表面に現れていない。その代わり、過熟した、美しく退廃している社会の魅力が溢れている。間もなく崩れてしまう近世文化の最後を飾る『梅ごよみ』という小説の中では春水は悪くて古い時代を讃美した。

同時代の歌人であった橘曙覧はもっと批判的であり、歌の中に時代に対する不満を盛り込んだ。「やまとうた」は、「天地を動し、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」るものだと紀貫之が『古今集』の序に書いたが、「やまとうた」が革命を促進するという意味ではなかろう。が、曙覧の歌には政治的な意味が濃い。曙覧の歌にも春水が描いた情緒があるが、彼の歌は、『古今集』の序に取り上げられた「男女の中を和らげ」るような上品の媒体ではなく、もっと低い次元の、幕末という時代を思わせるものである。しかし、曙覧には、春水になかった別の一面があった。つまり、愛国主義者であったのである。

平田篤胤の場合は、愛国主義者というよりも一種の狂信者であった。が、何となく親しみやすい狂信者だったと言わなければならない。二十五年ほど前に『平田篤胤全集』を一応読んだことがあるが、非常に面白い人物だと思ったので、篤胤と蘭学について長い論文を発表したこともある。篤胤のことを文学者だと言うべきかどうかよく分からない。文章の大部分は談話体で、繰り返しが多く、決して名文ではないが、驚くほどの人間味が至るところに溢れている。実は「文学散歩」の計画を立てていた頃、一番最初に選んだ人物が篤胤であった。寅吉という「神童」が天狗に案内されて月面まで旅行したという話は、言うまでもなく篤胤の思想を代表するものではないが、篤胤という不思議な人間の一面を覗かせてくれる。また、同時に、「夜明け前」の迷信と科学との結合として興味深い。

篤胤も曙覧も熱望した維新を見ることができなかった。しかし、維新に幻滅した文学者もいた。旧幕時代に特に優遇された漢学者の中にそういう人がいたとしても不思議ではない。大沼枕山は、自分の故郷であるお江戸に田舎者が津波のような勢いでなだれ込み、昔の町の品位がなくなり、黄金万能の世の中になったことを悔やみ、丁髷頭を変えないで、一人で維新に対する抵抗を続けた。枕山の漢詩は明治初期の東京の雰囲気をみごとに伝えている。皮肉もたっぷりあり、読者を苦笑させるような観察が見られる。が、最後まで旧幕に忠義をつくした枕山はしまいにおかしく見られるようになった。戦国時代の臨機応変を心得ている連中と比べ、面白い対照をなしている。

丁髷姿ではなかったが、仮名垣魯文は同じように新しい時代を嘲笑した。魯文は別に文明開化に抵抗したというわけではないが、当世の風俗を諷刺する人の多くの習わしに違わず保守的な立場に立ち新しいものを漁る同時代人を馬鹿にしていた。戯曲文学の伝統をひいた魯文は別に深い思想の持ち主ではなかったが、舶来の思想は日本人に合わないと思い、文明開化をテーマにして、言葉だけから成った滑稽本を幾冊もこしらえた。

『佳人之奇遇』を読む時、現代の読者は笑いを禁じえないことがしばしばあろうが、それは枕山の詩や魯文の戯作文を読む時の笑いとは明らかに違う。生真面目である東海散士を馬鹿にするわけではないが、極端な熱心さで自由や革命のことを唱えている小説の人物たちはあまりにも明治的で、滑稽である。そして、たとえ笑いを誘ってもそういう人物をうらやましく思う他はない。懐旧の情

に堪えなかった枕山と違い、東海散士は前向きの思想を持っていて、進歩を確信している。われわれから見ると、明治後期は決してすばらしい時代に見えないが、東海散士は将来について何も疑問を持たず、未来の日本を待ちかねているのである。その後の歴史の発展によって彼の期待は裏切られたが、『佳人之奇遇』に表現されている信念はほほえましいだけでなく、悲壮な面もあった。

正岡子規の話で散歩を終わることにした。明治初期における他の文学者の作品には近代的な要素が入っているに違いないが、子規の場合、評論や日記そのものが近代的である。歌や俳句などの伝統的な詩型を守りつつ、読む者を近代世界に導いてくれた子規は、まさに古い文学と新しい文学の岐路に立っていた。彼の業績を論じながら、長い散歩の終着点に到着した。いくぶんか疲労を感じたことは事実だが、有吉さんが心配して下さったほどでもない。私にとってはなかなか快い散歩であった。

週刊朝日の湧井昭治氏および秋山康男氏の特別企画のもとで、私の異色連載ものが週刊誌に載るようになったが、私にとって両氏の激励は本当に力強い支えになった。また一冊の本にまとめるに当って出版局図書編集室の宇佐美承氏および天羽直之氏のお世話になり、ここに厚くお礼申し上げる次第である。

一九七五年十月

ドナルド・キーン

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook